
アンノウン・ワールド

麒麟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンノウン・ワールド

【Nコード】

N2587X

【作者名】

麒麟

【あらすじ】

日常からの脱出を望む白刃が深夜に出会った電波さんに突然「私は神だ」と言われ突然異世界につれていかれているゆるゆる話です。最強チート主人公ものです。苦手な方はお控えください。処女作ですので指摘、感想などがありましたらお手柔らかにお願いします。

*今後色々な要素が加わる可能性があります。

第1話 自己紹介

俺の名前は黒宮クロミヤ白刃シラハ17歳

ただの高校生だ

成績はそこそこ

スポーツはどちらかといえば優秀

顔は中の上と自己診断している

部活は剣道部

理由は叔父が道場をやっているからである

さて次は俺の日常について話そう

それはただただ暇な生活だ

両親はおらず叔父の家に住んでいる

そんな俺でも中学の時から思っていることがある

それは・・・日常からの脱出だ

周りから見れば厨二病の診断をされる

だが俺は思っていた

「そんなもののが悪い！人にはそれぞれ個性があるんだよ！」

つと話がずれたなともかく俺は日常からの脱出を望んでいる

第1話 自己紹介（後書き）

次からはもう少し
長くなると思います

第2話 死亡フラグ

ただいまの時刻は午前2時です

季節は2月です

気温はマイナス2 です

〓 死にますね

場所は公園

なぜこんなところにいるのかと言うと・・・鍵をなくしたからである
叔父は今出かけていて家にいない

〓 やっぱり・・・死にますね

記憶を読み返して公園まできたのわいいが肝心の鍵がない
この状態を打開するには

一刻も早く鍵を入手し

家に帰り

風呂にはいる

これしかない！

そんなことを考えていると

「チリン」

つという音がした

「おっ、この音は」

といいながら探すと

鍵があつた

「やっと見つけたこのままじゃ、マジでやばかった」
つといい自転車で帰ろうとするまで

約1・5秒

ただいま自分黒宮白刃は

競輪選手もびっくりな速さで

家に帰っています

そして家の前の十字路を渡った瞬間それが起こった

.....トラックが突っ込んできた

結果、衝突〓自分死亡の方程式がたつたとき

.....トラックが止まった

よく見ると運転手も口を大きくあけたまま
止まっている

「なんじゃ、こりゃあ！」

つとといった矢先

「いやあーまいったねえーミスしちまった」

いかにもフヌケタ声が聞こえた

第2話 死亡フラグ（後書き）

感想、指摘など気軽にしてください

第3話 電波さん登場!?

「いやぁーまいったねえーミスしちゃった」

俺は目が点になっていた、理由は

- 1 時間が止まっている
- 2 深夜の2時に14歳にも満たない少女が目の前にいる
- 3 浮いている

「な、な、なんなのお前？」

「ん？私か？私はシエラ、、、神だ」

(電波さんか、まあいいや)

「えーとシエラさんかできたらいまの現状を教えてくださいませんか？」

「ん、いいだろう今お前が死にそうなところを私が気まぐれに助けたところだ」

「気まぐれかよ!」

「はぁー、にしてもやっちゃったなぁー」

なにか困っているようだがここで聞くとめんどくさいことになりそうなので黙っていると

「あつそうだおいお前私の頼みを聞いてくれないか？」

「どんな？」

「一緒に違う世界についてきてくれ」

あーはいはい

「紙は持っているか？今から腕のいい精神科の医者をおしえてやるから、しっかり覚えておけよ」

「あははは、おもしろいこと言うなお前まあお前の意見は関係ないとりあえずいくぞ

、、、今すぐ」

「あつ、おい待て」

その瞬間目の前が真っ白になった

第3話 電波さん登場!?(後書き)

これからすこしずつ

長く書いていくつもりです

第4話 えっ夢じゃないの!?

起きたら森の中だった

「えっ、なにこれ?」

自分の状況を思い返してみた

(俺は公園から帰ろうとしていて

トラックにはねられそうになり

そこで電波さん登場!

そんで見事な電波ぷりっを見せてもらい

精神科を紹介してやろうとして

いきなり目の前が真っ白になって)

「どこどこ?」

そう疑問に思ったそのとき

草むらのほうから音がした

「がさがさ」

(うわぁー、なんかいるよ

また死亡フラグたちそうだよ

最近はなんだ

死亡フラグキャンペーンか?)

自分の不幸を嘆いていると音の主が現れた

狼だった、それも特大サイズの

全長2メートルはあるだろう

(ほらたった、また死亡フラグだったよ)

そんなことを考えた時、頭のなかで声が聞こえた

「やつほー元氣ー、いきなり災難だねえー」

(ふざけてる絶対こいつの仕業だ)

「ちがうよぉー」

(心を読みやがった!)

(まあいいや、どうせ夢だろう)

そう思った時、頬に風が通った

「痛っ」

触ってみると、血がついていた

「これは夢じゃないよぉー」

また聞こえた、ちよつとまて

痛い？夢なのに？

「だから、夢じゃないよ現実だよぉー」

えっ、マジで？

第5話 神様のお礼

「ウオオオオオオーン」

狼が吠えた、どうやら

さっきの風も狼がやったようだ

「おいおい、マジかよ完璧に死亡フラグたつたよ」

「大丈夫、大丈夫、君にはこんなところまでできてもらったんだから、ちゃんとお礼はしてあるよ」

「どんなのだよ！ちゃんと使えるやつだよな！この状況を打開するには狼たおすしかないんだぞ」

そんなに簡単なことじゃない、狼はあの正体不明の風が使えてでかいわりには、速そうだ

「それじゃあ説明してあげよう、まず君の能力は全て上げておいた、たとえば筋力これは上げる前がEだったとして今の君はB+だ」

「ふむふむ」

うなずいていると、狼がめちゃくちゃなスピードで突っ込んできた

「うお！あぶねえー」

「今避けられたのも君の視力があがっているからだよ」

狼も避けられるとは思ってもおらず、少し慎重な動きになった

「じゃあ、もう一つ特別に君にプレゼントをあげよう」

「おっ、なんだ？」

「これだよ」

そういつて目の前に現れたのは………木の棒

「こんなもので勝てるかあー！」

つつこみをいれていると、また狼が突っ込んできた、さっきとは段違いの速さで

「大丈夫だよ以外に頑丈にしてあるから」

（信じられねえー）

第5話 神様のお礼（後書き）

話がなかなか進まなくてすみません

第6話 初戦

突っ込んできた狼は時々、残像が見えるくらいまで速くなった

(まだ速くなるのかよ、ちよっとやばいぞ、だいたいこの木の棒本
当に頑丈なんだろうーな)

狼はさつきからあの風は使ってこない

「やるなら今しかないな」

体制を立て直し次の攻撃に備えながら、様子を伺う

その時また狼が突っ込んできた今度はさらに速い

「きた！」

白刃は今、剣道の試合並みの集中をしている

突っ込んできた狼の頭にカウンターを喰らわせてやろうと思いつく

その時、狼が急に止まった完璧に先を読まれ体制が崩れるその時を
待っていたかというように

狼が飛びかかってきた

(やばい！喰われる)

その時浮かんできたのは叔父との試合だった、その時もこんな感じ
だった

叔父にカウンターを喰らわせてやろうとして避けられた、体制が崩
れ試合に負けたその後叔父にこう言われた

「動きが単純すぎる、あの状況なら緊急回避でもしてみる！バカた
れ」

その時は頭が回らずそんなことは思ってもいなかった

(けれど今ならできる)

すかさず崩れた体制の思うままにして回避した、回避して立ち上が
り狼の頭に棒を叩きつけた

「キャン！」

と、いいそのまま狼は倒れ込んだ、同時に俺も倒れた

第6話 初戦（後書き）

戦闘シーンがうまく書けません
アドバイスお願いします

第7話 説明(1)

今度起きたら湖の前だった、周りをきよろきよろしていると、なんだか久しぶりに聞いた気がするうつつとうしい声が聞こえた

「起きたあー？」

「あー、起きましたよつーかお前なんかなれなれしくない」

「そうかあーいやあー元氣そうでなによりだあ、連れてきていきなり死ぬのは後味悪いしねえー」

なにごともしなかつたように話だした神様(?)

(まあいいや)

「ところであんた、姿は見せねーの？」

「見せないよあー今出ていったら確実に殴られそうだし」

「殴りはしないけどストレスは溜まっているな」

「でしょあー」

「それはまた今度にして、とりあえず話を進めてくれ」

いつになつても話がすすめないのにだんだん、いらいらしてきたからこら辺で打ち出してみた

「そうだねえー、そろそろはなしますかねえー、さてどこから話したもんかねえー」

ねえーねえーねえーねえーうるさいなと思いつつ我慢していた

「じゃあ、まずここにくることになつた理由を教えよう」

あいつの話によるといまこの世界では未曾有の大災害がおきてしまい人口が著しく減つてしま

そのためモンスターや魔物がはびこつてしまいそれを解決するために俺を連れてきたらしい

「でつ、お前のミスつてなに？」

「あゝ、それはねえーモンスターを増やしちやつたんだよ」

「はあ？」

「だからあー増やしちやつたんだよ、モンスターを！」

あいつによると自分の担当する仕事がモンスターに関係するものらしく

上司に災害のことを聞いたのが丁度モンスターを増やしたあとだったらしい

「なるほど、つまりそのモンスターを減らすのを手伝ってくれと？」

「そうそう、わかってるじゃん」

第8話 説明(2)

無責任かつ適当だな、と思いつつ心の中では笑っていた

(俺の長年の望みが叶った、よっしゃああー)

と喜んだ後に一つの疑問が上がった、そもそもなんで俺なんだ？他の奴でもいいはずだ

「なあ、なんで俺なんだ？」

「なんでって、君は昔そんなような願いを言ってたじゃん」

(うん？そういえば昔、中三の時にそんなような願いをした記憶がある)

「えっ、ちょっと待てということは神様(?)には願いが聞こえるのか？」

まだこいつが本当に神様かわからないので疑問系だ

「なんで疑問系なの！神様だって言ってるじゃん」
頬を真っ赤にしてふくれている

(あぶねえーときめくとこだった)

ふう、と息をついて話題を戻した

「でっ、どうなんだ？」

納得がいかなさうだが諦めて話だした

「うーん、確か特定の願いは聞こえるようになっていたと思う」

(なるほど、ということは俺が願ったものはその特定の願いなのか)

「それでどんな災害だったんだ？」

これからこの世界に住むのだからある程度の知識はなきゃいけない

「えーとね、最初は地震でその後には火山噴火でしょ、その後は謎のモンスター大発生！」

「謎のモンスター？」

「今の環境に適応したモンスターだよ」

第8話 説明(2) (後書き)

更新が遅れて申し訳ありませんでした

またこのようなことがあるかもしれませんがなにとぞ

ご理解いただくようお願いします

第9話 説明(3)

説明が苦手なのかとてもおおざっぱな説明をされた

「もうちょいくわしく」

「え〜とね、たとえば火が嫌いなモンスターが災害の影響で進化して火に強くなるみたいなの」

「ふーん、ん？そういえばさっきの狼は？」

「そんなの君の隣にいるじゃん」

「えっ」

そう言っ隣を見ると

(なんじゃ?)

「じゃ、しゃべった」

(なにを驚いておる、わしはもう1万を超えておるのじゃぞ言葉ぐらいしゃべれるわ)

今気づいたが頭に直接話していたようだ

「それで？あんたがくれた俺の能力のくわしい」**「ここ強調」**説明をくれ」

「う〜んとねこの世界にはギルドというものがあるんだ、そこでカードが作られるんだけどそのだと筋力、魔力、体力、知力、神力があるんだけど君はすべてB+以上になっている一般の冒険者はC+っていいばいいところだよ」

「ふーんつまるところ俺はわけだ」

「まーね、君ならそのうちAにでもいきそうだね」

すこし冗談じみた笑みを浮かべていった

(さっきから聞いておったが何をいつておるのじゃ?)

いままでしゃべらなかつた狼がまたしゃべった

「そういえばきみ名前は？」

「わじに名前はない、でまねばおめこしてくねぬか？」

第10話 名前

(名前か、どんなのがいいんだろう)

そしてもう一度狼をじっくり見てみた、目はエメラルドのように綺麗で、毛は灰色というより白にちかくて、黒い線が2本左右に入っている

「ちなみに性別は？」

(メスじゃが)

「じゃあくラル>で」

そう言った後、ラルが光った

「なんだ？」

光がやんだ光からでてきたのはエメラルドの目をした美女だった

「誰？」

「たった今名前を付けたばかりじゃろつが」

半分あきれ顔の美女が言った

「ラルか？」

そう言った時完全に光がやんだ、全身が見えた、言葉のとつりの意味で

「んなー！ー！ー！？」

そんな声が森に響きわたった

「ふ、ふ、服は！？」

「ないの」

あっさり言ったこうしちやいれないと思った白刃は

「おい！神様なんでもいいから服を着せてやってくれ、今すぐに」

大事件だった、危なかった、俺は高校生だよあんなものを見て冷静でいられるわけがない、あの後神様が服を着せてくれたが後1秒遅かったら俺はまちがいなく気絶していた

「なさけないのー」

「なさけないねえー」

二人からばかにされた

「もういいだろ、それでラル自己紹介してくれよ」

第11話 自己紹介 part 2

「ふむ、そうじゃのうなにから話たものか、まずわしは神獣種、風の精霊の祝福を得たウインドウルフじゃ」

「神獣？風の精霊？」

よくわからない単語がでてきた

「あー神獣ていうのはね、精霊の祝福を受けてなおかつ世界に8匹しかないんだよ」

「ふーん、精霊は？」

「精霊は火、風、雷、土、水、氷、闇、光をつかさどる者たちのこと君の世界では天使って言ったかな」

そんなにすごいものなのかと関心していると疑問が浮かんだ

「なんでラルはこんなところにいるんだ？つーか個々どこ？」

「個々はギミア大陸のスジアの森じゃが、わしはここに住むどころからなんでと言われてものう」

なんでは失礼かすまんと謝り、なんでさっきいきなり人になったのか聞いた

「それはお主と契約したからじゃ」

「契約？」

また知らない単語だ、今度もシエラが教えてくれた（いつまでも神様はやめると言われた）

「契約とはそのとうりの意味で賢獣や神獣と契約をかわしいつしよにいることをいうのだよー」

「なるほど、でもさっきの質問の答えにはなっていないな、続きを教えてください」

「ふむ、通常賢獣と契約をしても人にはなれないだがわしら神獣は別ものでの、契約を交わすとなんでか人になれるのじゃ」

第12話 契約

話を聞いた後、俺はこう思っていた

(いいかげんだあー！)

まあそれは置いといて

「ラルは俺と契約を交わすとどうなるんだ？」

「さっき言ったとおり、基本契約を交わした者は一緒に旅をしたり
コンビを組む者もあるの」

「ふーん、でもなんでラルは俺と契約を交わしたんだ？」

それがさっきから気になっていたものだ

「それはの、お主がわしより強かったからじゃ、わしはいままで自分より強い者に会ったことがなかったのじゃ、だからお主に興味がわいての」

「なるほど、じゃあいつまでもこんなところにいるわけにもいかな
いしそろそろ行くかねえー」

「行くにしてもどこに行くのじゃ？」

そうだった俺は今どこにいるのかもわからなかったんだぞどこに行
くにも道がわからない

「じゃあ途中までの道は教えてあげようじゃないかー」

シエラが助け船を出してくれた

「じゃあとりあえずー、一番近くてギルドのある町に教えてあげよ
う」

話によるとここから町まで少なくとも30キロはあるらしい、その
話を聞いたラルが

「じゃあわしが連れて行ってやるう」

と言った風の精霊に祝福を受けたのだから1時間もせずに着くじゃ

ろく、といとも簡単に言った

第13話 盗賊と遭遇

実際、半信半疑だったラルに乗り走り始めて10分時速200キロはあると思われる減速なしのノンストップドライブをしている、ラルは気持ちよさそうに快走をしている、俺はというと

「オエエエエ！」

ゲ を吐いていた、。。

ラルはそんなことを気にもせず爆走している

俺はその数分後、意識がなくなった、。。

起きたのは突然だったいきなり前の方から爆発があったのだ

「なんだ？」

その疑問に答えたのはラルだった

「盗賊じゃな」

前を見てみるといかにも盗賊ですね、と言える奴等が20人ちかく居た

村でもあるのか？と思いを周りを見るがなにもないすると盗賊の前に何があるのがわかった、。、馬車だ

「人はいるのか？」

とラルに聞くとラルは

「先ほどの爆発で5人いた商人らしき者と3人いた冒険者は馬車から投げ飛ばされ盗賊によって殺されてしまった」

と残念そうに言った

それを聞いた白刃はすさまじい殺気が溢れ出していた

「そいつぁー少しお灸を添えてやらなきゃなあー」

そう言った瞬間白刃いなくなり、全力で盗賊めがけて走っていた

第13話 盗賊と遭遇（後書き）

少し下品かと思ったので をつけておきました

第14話 怒りは我を忘れる（前書き）

残酷なところがあります注意してください

第14話 怒りは我を忘れる

白刃は昔いじめを受けていた理由は親がいないからであるしかし白刃はいじめを受けていた時一度だけ反撃したことがある、その時のことは覚えていないらしいだがその反撃された子供たちは二日意識が戻らなかったそうだ

白刃は100メートル程の距離を5秒ぐらいで走ったこの時は考えなかったが後から考えるとシエラからもらったものだときずいた、そして盗賊の前に立った

「なんだてめえーどこから現れた!」

リーダーらしき人が言った

「そんなことどうでもいいだろ、俺はただあんた達を殺しにきたんだからよおー」

「たった一人でなにができたよガアー」

他の盗賊が言い終える前に白刃はそいつの首に蹴りを射れた、、おそらく即死だろう

「な、なにしゃがっー」

次も言い終える前までに頭を地面にたたきつけた、地面が真っ赤に染まった

リーダーらしき奴がいち早く正気にもどり指示をだした

「せ、旋回しろ!こいつ速いぞ」

言っている間も白刃は戦闘を続ける、バキッ、ボキッ、ゴキン、メキッ、などの骨が砕かれる音が聞こえる

「うわあああー!助けてくー」

悲鳴をあげる時間も作らせず殺していく

次々と殺していく中で逃げる奴も出始めた、そんな奴も逃がす前に殺した

第15話 後始末

最後の一人はあのリーダーみたいな奴だ、近づくと

「ま、ま、待つてくれ助けー」

よけいなことを言う前にこいつも殺した、周りをみるとどこもかしこも死体だらけだ

「こいつらどうしよう?」

そんなことを言うとラルがきた

「大丈夫か、お主があそこまで強いとは思わんだ」

そんなに酷かったのだからと思うと、顔にでていたのかラルが言った

「あれはまるで鬼神のようじゃった」

「鬼神?」

またまた知らない単語がでた

「鬼神とは伝説上の最強の冒険者じゃ、本当に居たかは解らぬが誰でも知っている話じゃろう」

そんな話を続けている間に地面に穴を掘った

「なにをするのじゃ?」

ラルが聞いてくる

「亡くなった人を伴ってやるんだ、このままじゃかわいそうだからな」

そう言っつて作業に戻りそれが終わるまでラルはさしやべらなかつた

盗賊は道の端に置いておき、ついでに剣を一本拝借しておいた

「さーて、じゃあもうひとつ走りするかねえー、あつてもほどほどにしてくれなほどほどに」

ちゃんと抑えて走るのを言っつておいた

「そうじゃのもうーっ走りするかの」

そう言った後、俺はラルの背中に乗った、地獄が待っているのも知
らず、。。。。

第15話 後始末（後書き）

できれば感想お願いします

第16話 魔法初挑戦

出発から1時間経過した、町はもうすぐそこだが時間がもう夜なので町の1キロ前あたりで野宿することにした

「まさか、あそこからあんなめにあはされるとは」

後悔してもたりない悔やみが全身をかけ回る、ラルには今狩りにいつてきてもらっている

「時間は今、8時つてところか」

シエラとは、あの後別れた、もし用があればむこうからくるらしい暇なのでために魔法でも使ってみようかと思いなんとなくイメージしてみる、魔法のやり方はある程度シエラに教わった基本的には詠唱しなければならぬらしいが俺にはその必要はないらしい

(手のひらに炎を出すイメージ)
するとバカでかい炎の塊が頭の上に現れた

(やばっ！)

魔力が多いがゆえに調節をまちがえた、まずいと思い急いで魔力を10分の1程に減らす、するとやっと手のひらに収まるほどまで小さくなった

魔力の調節をこれからしっかり覚えようと固く決意した

それから5分後ラルが鹿らしきものをくわえて帰ってきた

「なにそれ？」

「これはの、グルズといはれる鹿じゃ人型になり答えた」

「もう鹿でいいじゃん」

「まあ、お主がそれでいいならそれでよい」
そう言い、鹿を焼き美味しくいただいた

第16話 魔法初挑戦（後書き）

もう1作書くかもしれないので更新が遅れるかもしれませんが

第17話 町の前まで来た

夕飯を食べた後は白刃のくわしい事情を話た、それにラルは

「ますます興味が湧いたぞ」

と目をきらきらさせていた

そんな事をしながら明日の予定を話し合い今日は寝た

朝の7時、俺は目がさめたラルは狼の状態で寝ている、俺が起きたのに気がついたのかラルも目を覚ました

「んうーおはようじゃ、シラハ」

昨晚名前で呼ぶように言っておいた

「おはようラル、ぐっすり眠れたかい？」

朝の挨拶を返して、質問には「まあまあじゃ」と答えてきた

朝食にはラルが知っている食べれる草を食べた、感想は

(まずー！！?)

ここまで苦いとは思ってもおらず激苦の朝食は地獄だった

8時町の鐘がなり門らしきものも開いた(1キロ離れていても普通に聞こえたし見れた)

「よーし、じゃあのんびり歩いていくかな」

「ん、歩くのか？」

「朝からあんなスピードにはついていけない」

そう言いかるく吐きそうなのを我慢して出発した

町の前の門に到着した、身分証明がないのでおとなしく順番を守っている、ちなみにラルは狼であるギルドには賢獣として登録する予定である

すると前から門番らしき人がきた

「この賢獣はあなたのものか？」

「そうですね」

「悪いが一緒にきてくれ」

第18話 事情聴取！？

門番らしき人についていくと部屋に案内された

「さて、なんでつれてこられているか知っているか？」

「いいえ、俺なにかしましたか？」

突然言われた言葉にとりあえず否定しておく

「ここにくる間に盗賊に会わなかったか？」

「ああ、あれか、えっちょっと待って俺悪いことしたか？」

なんで事情聴取されてんの俺と少し不安になった

「いや、別に悪いことじゃないんだがなんせまったく状況が解らなくてな、目撃情報によると黒髪の変な服を着た冒険者らしき人が盗賊をボコボコにして殺して去っていったという情報が入っていてな、それが今、お前がここにいる理由だ」

「用はなにがあつたか話をすればいいんだな」

「そういうことだ」

納得した白刃はその時のことについて話した

「なるほど、そんなことがあつたのか」

話終えた白刃は少し疲れた顔をしていた

「よし、わかつたお疲れさんついでに入町審査もやってやるよまず名前を言ってくれ」

そんなこんなで入町審査が始まった

審査が終わると門番にこう言われた

「ギルドには連絡がいつているからもう話わしなくていいぜ、後俺の名前はセニアだわからないことがあつたらいつでもきな」

「おう、またくるわ」

そして歩きだした

第18話 事情聴取！？（後書き）

最近忙しくて更新できませんでしたすみません

第19話 迷子の達人

(時間は12時つとところか)

そんなことを思っている

「ぐうー」という音が聞こえた

「さすがに腹減ったなあ、朝から激苦の草に、事情聴取だからなあ」

(シラハ腹が減ったのか?)

ラルが話かけてきたちなみにラルは事情聴取のときには寝ていた

「そうだよー」

(ふむ、返答するのはよいが心で言ってくれ、周りから変な目で視られるぞ)

それもそうだと思い周りを視たが誰も気にしていなかった

また歩きだしたがここであることに気づいた

(俺どこに向かってんの)

(それはギルドじゃろう)

(だからそのギルドはどこにあんの!?)

(そんなことに今ごろ気づくとはもう、さっき聞いておけばよかつたじゃろう)

「っーか、ここどこ!?!いつのまにか裏道入っちゃったよー」

(シラハは迷子の達人じゃのう)

その3時間後やっとギルドに到着した

「おまちしておりました、シラハ様でございますね、こちらへどうぞ」

ギルドの職員が出迎えてくれた、そのまま部屋に案内された

少々おまちくださいと言って職員は出ていった、その3分後70はいつているだろうと思われる爺さんが現れた、爺さんはくるやいなやこう言った

「なごじや」の「まっくらくら」は「は」

第19話 迷子の達人（後書き）

新たにもう一つ小説を書いたのでよかったら読んでみてください
なんとか二つとも同時にやっついこうと思います
応援よろしくおねがいます

第20話 不幸（前書き）

投稿がひじょーうに遅れてしまいもうしわけありませんでした

第20話 不幸

「なんじゃこのまっくろくろ○けは」

入ってきて第一声がジ○リも代表作のあの『となりのトト○』のお化けだった

「いんの！まっくろくろ○けいんの！」

「うるさい！黙れ！まっくろ小僧静かにせんか！」

怒られたしかも今度はまっくろ小僧言われた

「でつとりあえずなんで俺はここによばれたんですか？」

気を取り直して本題に入った

「わかつておるじゃろう、盗賊のことじゃ目撃情報だけじゃ信憑性がないいन्दの」

「失礼しましたー」

わずか4分ぐらいの滞在に終止符を打ち部屋を出ようとドアに向かう

「ま、またんか、なんじゃいきなり」

「だってさつき散々話たのにまたあの長つたらしい説明をするのめんどくさいんですもん」

「わ、わかつたとりあえずその話はおいといてよい」

「それじゃ他に何の用があるんですか？」

正直一刻も早く部屋から出たい気持ちをおさえて再度部屋に入る

「報酬についてじゃ、小僧おまえがなにをしたかわかっておるか？」

「ただの大虐さー、盗賊退治」

一瞬虐殺というだけそれたことを言いそうになったがなんとかぎりぎりのところで回避した

「そうじゃ、盗賊退治じゃしかしそんじゃそこの盗賊とはわけがちがうBランク相当の盗賊じゃぞ」

第21話 ギルドマスター

「しかもそれを1人でやったというのだからのう、まったくいったい何者なんじゃお主？」

「何者かと言われてもなー軽く無理やり連れてこられたただの日本男児なんだけど」

「？、二、二ホン？なんじゃそれ？」

おつそういえばここは異世界だったないけない、いけない

「なんでもねーよ。とにかく俺はただの人間の黒宮白刃だ」

「ふむ、シラハとな、変な名前だがどこかで聞いたことがある名前じゃな、はてなんじゃったかなー？」

「ちなみにあんたなんて名前なんだ？」

「あんだではない、クランだクラン・デバイスただしお主に呼び捨てにされるのは威厳がないからギルドマスターでよい」

いまなにか聞き捨てならぬときいた白刃は。

「はっ？いまなんて？」

「ギルドマスター」

「はー！？つことはなんだ俺はいままで上司になるかもしれない人にこんな態度をとっていたと？」

「なんじゃ？お主まだギルド登録しておらんかったのか？なにをそんなに驚いておるのだ？」

（あれ？なにも言われないうちかして、なにも問題ないむしろノープロブレム？）

ちなみに白刃の英語の成績は地を這うが如しだったことは負の遺産だ
「まあなんでもよい、とりあえず、、、落とし前、、、つけてもらおうかのう」

第22話 やる気の問題！！

『突然ですが問題です今、白刃はどこに居るでしょうか！！』

1とある山の頂上

2とある秘境の中

3とある洞窟の中の魔物100体狩り！！

正解は、、、3

なぜ白刃がここに居るかというギルドマスターの言う落とし前をつけにきたのだ

「まったくいくらなんでも魔物100狩りはないだろギルドマスターの話によるとあんまり強くないらしいがめんどいな」

「いいんじゃないか」シラハは魔物を退治するためにここに来たんじゃろ？」

ラルは人になっています

「それもそうなんだけどなー、つーかあれなに？定番のゴブリン？」

「しかも何体もいるのーまっがんばれのー」

「ちよつラルやる気なしかよ！少しはやる気を見せよーぜ！」

そう言い終える前にラルは狼に戻り寝ていた

「あゝもゝしょうがねゝなやるか」

そう言つてこの前盗賊から拝借した剣を構えたゴブリンも殺る気と受け取ったのか奇声をあげた

「キシヤーーーっ！！」

「おりゃー！！」

奇声をあげたのと同時に白刃が動いた

ドサドサドサドサつと物が落ちる音がしたと思つとゴブリンが十分の一程が崩れおちていた。より正確には一瞬でゴブリンを10体程亡き者にしていた、だがひるむ間もなくゴブリンが次々と襲いかか

ってきた

「ん、、もう終わったのか？シラハ？」

「まだだよ！早く帰りたいならてつだつてくれてもいいんじゃないか？」

そう言つてまた一匹、一匹と切り倒していく

「しょうがないのおくシラハは、帰ったらなにかおごつてもらおうからの？」

「おくやる気になってくれたか」

シユパンつともものすごい風がおこつた

「うむ、では、、帰るぞシラハ」

遅れてゴブリンが倒れてきた、、

「お、おう」

（絶対におこらせないようにしよう、うん）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2587x/>

アンノウン・ワールド

2011年12月10日01時50分発行